東日本大震災から2年の3月11日。仮設住宅などで相談員の仲間と共に居室訪問活動を続ける本願寺派総合研究所・研究員の金澤豊さん(32)と岩手県と宮城県の被災地を訪ねた。法要参列者や報道関係者などで、にわかに人口密度が増した被災地。その傍らを復興作業の大型トラックが土煙を巻き上げて走る。「被災」と「復興」が交錯する光景に金澤さんは「大袈裟に言えば、明日ここに残っているのは地元の人だけ。そして2年という区切りが、復興の押しつけのように被災地の人を苦しめる。明日が心配」とつぶやいた。愛しい家族と別れた人、自分にできる支援を模索する人、悲しみに寄り添いたい人。「節目」という言葉と向き合う人々の姿を見つめた。(写真＝陸前高田市)

特集
東日本大震災

一つの節目だが、区切りにはならない

「聴く」活動続ける僧侶と「3月11日」を歩く

最初に向かったのは、岩手県一関市の正光寺(北畠浄春住職)。金澤さんは同寺の震災3回忌法要で講演することになっていた。太平洋沿岸から約50キロの内陸部にある。門徒の犠牲者はなかったが、多くの建物が全半壊の被害を受けた。約1年前、同県陸前高田市で居室訪問活動を行う際に金澤さんが同寺に立ち寄り、交流が始まった。

正光寺に向かう途中、「ここの人は人的被害を免れたために、地震で被災したにもかかわらず『沿岸部の人に申し訳ない』という苦しみを抱えてきた。今も支援の方法を模索している」と金澤さんが教えてくれた。

同寺総代の小野寺次雄さん(75)が迎えてくれた。「苦しんでいる人がいるのに助けに行くことも、現地で支援することもできなかった。家族を亡くした人とどう接していいかもわからず、私たちにできるのは沿岸部の工事を優先させるために自宅の修理を我慢するくらいのことだった」。

被災地を取り巻く複雑な苦悩が垣間見える。同じ苦しみを抱えていた北畠住職は「震災2年を機に本願寺の被災地での活動を知ってもらい、支援を考える機縁にしたい」と金澤さんに講演を依頼したという。

金澤さんは講演で『わかりたい』『寄り添いたい』という気持ちが被災した人の苦しみを少しでも和らげることを願い、活動している。苦悩はさまざま。『被災地』ではなく、一人一人の悲しみに寄り添う『被災者』支援が大切。支援に遅いも早いもない、一緒に考えていきましょう」と語った。

◇

宮城県気仙沼市に向かった。その移動中、金澤さんは「訪問先で相手から受け取った気持ちを振り返りながら、こうして話し合えるのはありがたい」と安堵の色をにじませた。被災地で心砕く金澤さんもまた孤独を抱えていた。悲しみに寄り添う人同士が寄り添うことの大切さが伝わる。

同市沿岸部の鹿折地区に到着した。「すがとよ酒店」を営む菅原文子さん(63)と家族・知人が、基礎だけが残る自宅兼店舗の跡地で待っていた。一帯が津波に襲われ、震災直後は、瓦礫や大型漁船までが突っ込んだままで家屋が残されていたという。

今はそれも撤去され、舗装の剥がれた道路と建物の基礎だけが眼前に広がる。創業90年の「すがとよ酒店」も1階の店舗が破られ、震災後しばらくして取り壊された。

そこで津波に遭い、夫・豊和さんと義父母の家族3人を亡くした文子さんは、知人の紹介で知り合った金澤さんに「自宅のあった場所で家族と手を合わせて3月11日を迎えたいのですが、ご法話をお願いできませんか」と電話をかけた。

自宅跡に建てられた小さなプレハブの前には、酒瓶のケースを積んで作った荘厳壇に花や写真が供えられ、中央に金澤さんが持参したご本尊が安置された。無邪気に遊んでいた幼い豊和さんの孫たちは、近くから摘んできたクローバーをそっと供えていた。

午後2時46分。震災が起きた時刻を告げるサイレンが辺りに響く中、全員が手を合わせた。

おつとめした後、金澤さんが参列者にやさしく語り始めた。「私たちは震災で無常を痛感しましたが、お釈迦さまが説かれた無常は、形あるものがなくなっていくことばかりではありません。移り変わりの中でご縁が育まれ、新しいものが生まれていくこともまた無常です」。その言葉は、震災で形を変えてしまった町に静かに響いた。

「私には『無常』が『希望』に聞こえた。すがるものも何もかもなくした人に、仏さまのお話は心をホッと落ち着かせる依りどころ。私は浄土真宗の門徒ではないけれど、本当にありがたかった。つらさも不安もまだ拭えないが、震災を通していただいたご縁を力に悲しみと向き合いながら歩んでいきたい」と話す文子さん。3人の息子ら家族と力を合わせ、仮店舗で商いを再開している。

◇

「時間の許す限り、見てください」。夕日が稜線に沈もうとしても、金澤さんは時間を惜しむかのように次の被災地域に車を走らせた。

2年の節目は迎えたが、それを区切りにはできない。居室訪問は続く。明日もまた、仲間たちと共に仮設のドアをやさしく叩くのだと思った。

宮城県気仙沼市。菅原文子さん家族は自宅のあった場所で3回忌法要を営んだ。僧侶と話す子どもたちはクローバーを荘厳壇に供えた